

名 称 : 財団法人 成田空港周辺地域共生財団

設立年月日 : 1997(平成9)年7月28日
民法第34条の規定による許可
国土交通省東京航空局長及び千葉県知事の共管

基本財産 : 6億円
千葉県及び関係自治体(3億円)
成田国際空港(株)(3億円)

運用財産 : 100億円
千葉県及び関係自治体(50億円)
成田国際空港(株)(50億円)

所在地 : 成田市花崎町750番地の1

設立の趣旨 :

当財団は、騒防法等の枠組みを越えた、地域の実情に即したよりきめ細かな騒音対策、周辺対策等の事業を実施することにより、成田空港とその周辺地域との共生の実現を図るとともに、成田空港をめぐる地域社会相互の理解と一体感を深め、周辺地域の発展に寄与することを目的に設立された。

事業概要 :

民家防音工事助成事業

騒音区域やその隣接区域の住民が、航空機の騒音を軽減するため行う防音工事に対し、その費用の一部を助成している。

騒音対策周辺事業

空港からの影響を和らげ、良好な地域づくりを目指して次のような事業を行っている。

- ・住民の健康に係る事業
航空機の騒音が住民の健康に与える影響などについて調べている。
- ・環境問題に関する講演・研修等
環境問題への理解と関心を深めてもらえるよう講演会などを行っている。
- ・騒音用地からの移転に係る住環境の改善に対する支援事業
騒音地区からの住宅移転を円滑に行うため、移転先地での埋蔵文化財調査を行う必要が生じた場合に当該費用の一部について助成を行っている。

航空機騒音測定事業

千葉県、茨城県、市町および新東京国際空港公団の各航空機騒音測定局(103局)の測定データを財団で構築した「航空機騒音データ処理システム」で一元的に集計・解析し、公開している。

航空機騒音等の調査研究事業

正確で信頼される航空機騒音評価を行うための調査研究業務を行っている。

成田空港周辺緑化基本計画（概要）

関連資料

1995年（平成7年）3月22日

空港建設により失われた緑を回復するとともに航空機騒音への影響を軽減するため、NAAは、1995（平成7）年3月に「成田空港周辺緑化基本計画」を策定した。この計画は、防音堤・防音林整備計画と空港周辺緑化整備計画の2つのプロジェクトを柱とし、空港周辺地域に豊かな自然を取り戻すために、緑化を進めるというものである。

防音堤・防音林の整備にあたっては、防音堤を基本とし、空港境界から概ね100mとする。ただし、既存林が十分に繁茂している場合は、既存林の自然価値や防音効果を総合的に勘案し、防音林または防音堤と組み合わせにより整備することとしている。（図1参照）A滑走路に対応した防音堤・防音林の整備については、概ね1999（平成11）年度中に完成した。平行滑走路に対応した防音堤・防音林の整備については、平行滑走路等の整備にあわせて1999年（平成11）8月に整備計画を策定し、これに基づいて順次整備を進めている。

また、空港周辺の緑化整備にあたっては、地域の環境、地形、植生などを考慮し、6つのゾーン（空港と緑のゾーン、空と水のふれあいゾーン、緑豊かな街づくりゾーン、田園ふれあいゾーン、花と緑のゾーン、旅立ちと緑のゾーン）に分けて、地域の特性を生かしながら緑化を進めることとしている。（図2参照）

図1

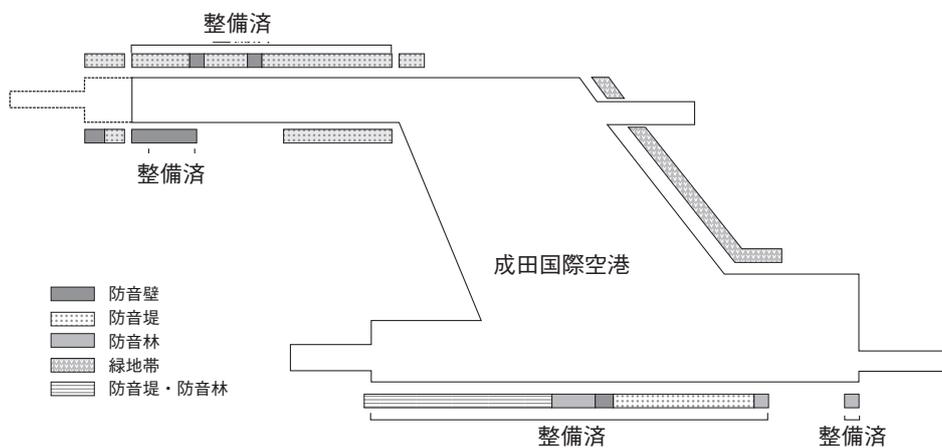


図2 空港周辺緑化整備計画

千葉県の花植木センターのある当該地域は台地景観となっており、さまざまなレクリエーション活動の拠点として整備することとし、果樹林等の整備を図る。

花と緑のゾーン

谷津田景観が良好な形で残されており、周辺地区の原風景を次世代に残していくためにも、自然環境保全機能の拡充を中心とし、修景機能の導入を図る。

田園ふれあいゾーン

芝山鉄道の芝山千代田駅がある地区であることから、新しい市街地の形成に合わせて街路樹等の整備を積極的に行い、緑豊かな街並整備を図る。

緑豊かな街づくりゾーン

旅立ちと緑のゾーン

千葉県において成田国際物流複合基地建設計画が進められている地域であり、これらの整備と整合を取りつつ修景機能を中心とした緑地の整備を図る。

空港と緑のゾーン

市街地が近接するため、生活にうおいを与える遊歩道や地域の方々が安易にアクセスできる緑地整備を図る。

空と水のふれあいゾーン

航空機の飛行コースの直下であり、航空科学博物館に隣接し豊かな湿地を有していることから、水生植物を主とした緑地整備を図る。

1998年（平成10年）12月16日
運輸省航空局
新東京国際空港公団

1. 基本的な考え方

（1）成田空港問題の解決

成田空港問題については、成田空港問題シンポジウム、円卓会議の結果、これまでの対立構造の解消が図られ、今後は地域と空港との共生という理念のもとに、国・空港公団は地元自治体・地域の方々のご協力を得ながら、新しい共生の時代をつくっていくことになりました。

さらに、平成10年5月には、円卓会議で残された課題であった「地球的課題の実験村」構想具体化検討委員会が終結しました。そして、これらの動きを受けて、隅谷調査団からも、「成田空港問題は社会的に解決され、今後関係者が進んでいく道筋が理念的にも示されるようになった」との所見が発表されました。

本年7月には、基本的考え方に示した施策の具体化の状況にも触れつつ2000年度を目標とする平行滑走路等の整備を含む「成田空港の整備の全体像と手順」をとりまとめ、地域に提案させていただきました。その後、50を越える関係自治体をはじめ、住民団体等に直接ご説明させていただく機会を得ました。その際に頂戴した数々の貴重なご意見も踏まえ、ここに、これからの具体的指針として、「地域と共生する空港づくり大綱」をとりまとめさせていただきました。

（2）これからの空港建設・運用にあたっての基本的な理念

これからの空港の建設・運用にあたっては、何と言っても地域と空港との共生の実現を図ることが大切であり、そのためには地域の方々と十分に話し合い、それを通じて地域との信頼関係を築くことが重要です。円卓会議の場で示しましたとおり、空港づくりは地域づくりでもあり、国と地域との共同事業であると考えています。国・空港公団はこの空港づくりの原点に立ち返り、「地域と共生する空港」の実現に向けて、共生策、空港づくり、地域づくりをいわば三位一体のものとして相互に密接に関連させつつ進めてまいります。

①共生策

地域と空港との共生という理念は、成田空港がこの地にある限り続く永遠の課題です。空港からのマイナスの影響を軽減することに万全を尽くすとともに、地域の農業振興についても、本年5月に発表したエコ・エアポート基本構想に則して取り組んでまいります。

②空港づくり

国際交流の拠点にふさわしい空港となるように、話し合いにより2000年度を目標として平行滑走路を整備するなどの空港づくりを進めていきます。

さらに、エコ・エアポート基本構想に則して、環境への負担や資源・エネルギー消費をできる限り小さくした循環型の空港づくりをめざします。

③地域づくり

地域づくりは、地元自治体や地域の方々を中心となって行われるものですが、国・空港公団も空港づくりは地域づくりであるという基本的な考え方に立って、地元自治体や地域の方々と一緒に取り組んでまいります。

2. 地域と共生する空港をめざして

（1）地域との共生の観点を盛り込んだ空港づくり

①共生策の充実

共生委員会の点検を受けつつ円卓会議の合意事項を着実に実施するなど様々な施策に取り組んでまいります。本年9月の共生委員会において、引き続き取組みを要すると指摘された事項については、共生の理念をもって、住民の視点で対応を行います。

特に、現滑走路の第一種区域と平行滑走路の第一種区域にはさまれた地域については、地元自治体と相談しつつ、地域の実態に応じた騒音対策の充実に努めてまいります。

また、落下物対策についても、今後とも対策を徹底してまいります。

②共生理念の実践体制の整備

（2）エコ・エアポートの対応

①地球的視野に立った循環型の空港づくり

(a) 中水利用施設の整備（平成10年度）、透水性舗装や総延長30kmに及ぶ碎石浸透トレンチの設置等（平行滑走路等の供用時まで）。

(b) ガスタービン型コジェネレーションシステムの導入（平成12年度供用開始）、低公害車導入計画（現在策定中）、空港内建物等に太陽光発電パネルの設置等（平成10年度から）。

(c) 取香川へ通じる場外放水路における多自然型川づくり（平成10年度現場試験）、空港公団所有山林について下刈りの実施等による適正管理、空港内外の緑化等。

(d) 厨芥のコンポスト化（堆肥化）に向けた取り組み等（平成10年度から）。

②空港周辺地域の農業振興への取組み

- (a) 移転農地の適正な保全等（レンゲの播種等）
- (b) 千葉県が計画している多機能型農業公園の整備への協力等
- (c) 剪定枝などを肥料化するための施設の整備についての検討

3. 国際交流の拠点にふさわしい空港づくり

- (1) 施設整備計画の目標
- (2) 平行滑走路及び地上通路
平行滑走路及び地上通路は、話し合いにより2000年度を目標として整備を進めます。
- (3) 旅客ターミナルビル・エプロン
 - ①国際線旅客ターミナルビル
 - ②国内線旅客ターミナルビル
 - ③エプロン
- (4) 貨物施設
- (5) 給油施設
- (6) その他空港隣接地における関連施設
- (7) 横風用滑走路
横風用滑走路については、平行滑走路が完成した時点であらためて地域に提案し、その賛意を得て進めます。
- (8) 平行滑走路の供用に備えた環境影響の把握等
現滑走路も平行滑走路も75WECPNLの騒音が及ぶ範囲は騒音対策を実施している騒防法第一種区域を超えないと予測しています。
- (9) 平行滑走路供用開始後の標準飛行コース
平行滑走路が完成した場合の標準的な飛行コースは、隣接する羽田空港等の空域に影響を及ぼさない範囲で、現行の飛行コースを基本として設定しました。また、特に到着する航空機の増加に伴い、安全確保等のために面的な飛行を指示する場合があります。直進上昇・降下等これまでの地域との約束事項を引き続き遵守してまいります。

4. 地域づくり

- (1) 計画的な地域づくりをめざして
 - ①空港周辺地域における計画的な公共施設の整備
成田空港周辺地域振興計画に基づく計画的な公共施設等の整備に対し、協力します。また、成田財特法の延長に向けて最大限の努力をします。
 - ②騒音区域における計画的な地域づくり
騒音区域の計画的な地域づくりを進めるための騒音特法航空機騒音対策基本方針の改定作業について、地域の意向が十分反映されるよう、全面的に協力します。
- (2) 交通網の整備
 - ①芝山鉄道
平成8年12月にお示ししました「今後の成田空港と地域との共生、空港整備、地域整備に関する基本的な考え方」に基づき一日も早い完成に向けて取り組んでまいります。
 - ②都心との空港アクセス鉄道整備
 - ③平行滑走路等の整備に伴う道路整備
 - ④その他空港隣接・周辺地域における道路交通対策
- (3) 国内線の充実
- (4) その他の地域振興
 - ①観光振興
 - ②成田空港の機能の活用等
- (5) 地域づくりのための施策の促進
空港の持つ可能性や活力を活用して空港周辺地域の均衡ある発展を促進する観点から、交通網や農業振興をはじめ各地域から提案された地域づくりの施策については、できる限り目に見えた形で早期に具体化することが肝要だと考えています。このため、関係地方自治体等と継続的に連絡協議を行い、連携を一層密にして、その計画の熟度や空港との関連性を踏まえつつ地域づくりを着実に進めてまいります。

5. おわりに

国・空港公団は、地域の理解を得ながら空港づくりを進めます。

また、空港づくりを進めていくにあたりましては、地権者の方々と誠心誠意話し合わせていただき、ご理解とご協力を得られるよう努力します。一坪共有地につきましては、共有者の方々のご理解をお願いするとともに関係の方々のご協力を得て解決を図っていきたいと考えています。

そして、すでに運用している施設の機能向上等のための工事を引き続き進めていくほか、平行滑走路等の整備については、地元関係者と十分な話し合いを行い、その理解を得て工事を行い、2000年度に完成することを目標として進めてまいります。

1998年（平成10年）5月27日

「成田空港問題円卓会議」の結論の一環として設置された「地球的課題の実験村」構想具体化検討委員会が1998（平成10）年5月1日に発表した報告書「若い世代へー農の世界から地球の未来を考える」では、現代社会が突き当たった地球環境問題や資源・エネルギーの枯渇などの問題を解決するため、人間と自然環境の関わりを踏まえ、循環を基礎として自らを律していくという考え方（実験村の理念イコール「農的価値」）を大事にする必要があるとの認識が示された。

空港公団は、この考え方を真摯に受け止めると同時に、空港が周辺地域の自然環境や農業にさまざまな影響を与えてきたことを思い、環境への負荷やエネルギー消費をできる限り小さくした循環型の空港づくりを目指すこととし、地球的視野に立った循環型の空港づくりと周辺地域の農業の再生への協力を2つの柱とする「エコ・エアポート基本構想」を5月27日に発表した。（下表）

エコ・エアポート基本構想の概要

エコ・エアポート 基本構想	1. 地球的視野に立 った循環型の空 港づくり（環境 への負荷やエネ ルギー消費をで きる限り小さく した空港建設・ 運用）	水循環の視点	・中水・雨水利用、雨水の地下浸透
		エネルギーと大気質の視点	・コジェネレーション、低公害車導入計画、太陽光発電、GPU
		自然環境の視点	・100万本の植樹等緑化の推進、多自然型川づくり
		廃棄物の視点	・ごみの再資源化、再生資源の利用 ・刈り草・コンポストの提供、ごみ焼却廃熱の利用
	取り組みの広がり	・エコ・エアポート推進懇談会の活用 ・各国の空港担当者に環境施策を紹介	
2. 空港周辺地域の 農業の再生への 協力	<ul style="list-style-type: none"> ・移転跡地の適正な管理、農業に配慮した保全の在り方 ・新たな農業振興貸付け（農業者育成プログラムの研修の場、循環型農法の実践、都市生活者等の啓蒙・体験プログラムの提供等） 		

若い世代へ―農の世界から地球の未来を考える

「地球的課題の実験村」構想具体化検討委員会

1998年（平成10年）5月1日

1. 現代社会の構造的、本質的課題

青く美しい地球の上で連綿と営まれてきた人物の歴史において、来し方を振り返り、未来を見渡したとき、いま、私たちは、いかなる時代を生き、どんな意味を持つ時を過ごしているのでしょうか。

約5百万年前の猿の仲間から分かれて、最初の人類が生まれたと言われていました。その後の進化を経て今の私たちと同じ現生人（ホモ・サピエンス・サピエンス）になったのは5万年ほど前のことです。大小さまざまな循環系に支えられ、同時にそれを担う多種多様な生物種の一つにすぎなかったヒトを人間につくり変えたのは火の使用であり、火の使用とともに意識が生まれ、原語が生まれたといわれます。人類はその生命活動を維持するため、道具を作り、あるがままの自然をつくり変え、ものや方法を将来のために蓄積してきました。人類が他の大型哺乳動物と大きく違ってきたのは、個体の維持と種の再生産のための生命活動にとどまらず、社会の存続と発展のための活動の比重が次第に高まってきたからだともいわれています。

約8千年前の農耕・牧畜の開始に始まり、鉱工業などさまざまな産業分野ができ、その後、産業革命と科学技術の飛躍的な発展を経て、現代まで人類はものを作り、自然を変え、人間独自の活動を拡大することに疑いを持っていませんでした。そのことが人類の生命活動の維持・拡大と直結していると考えられてきたからです。

しかし、いま人類は人間がつくり出したものに悩まされています。現代工業文明のもとで物質的豊かさや利便性を享受してきた人々は、今日、環境問題という手痛いしっぺ返しを受けているばかりでなく、工業文明の豊かさを享受できない人々も巻き込んで人類の生存基盤を危うくしています。いま自らが自然の摂理の中で生物界の一員として生きていることの再認識が必要だと叫ばれています。私たちは、これまで飢えや病気などさまざまな危機を乗り越える知恵を身につけてきました。しかしながら、環境ホルモンがヒトや動物の生殖機能を壊しているのではないかなどと、これまで予想もできなかった事態が生じてきています。今日、私たちが突き当たっているこれらの大きな壁は、既存の考え方の延長線上で解決できるのでしょうか。私たちが文明を陶冶し、未来へと存続させていくためには、新しい叡智を築いていくことが必要となっています。

今後、私たちはどのような文化・文明を築いていくべきなのでしょう。その際、どんなことを基本において行動していくべきでしょうか。いま、さまざまな所でそのことが語られ試みが始まっています。そしてこの委員会における検討もその一つの試みです。

地球の未来のために、もう一度現代社会を見つめ直すことから始めたいと思います。

(1) 現代社会の構造的、本質的問題とは

現代社会とはどんな社会でしょうか。

現代日本社会においては、さまざまな自由が保障され、技術発展に裏打ちされた現代工業文明によって、物の豊かさや便利さが享受されています。社会や家庭の隅々にまで電化や機械化が進み、人々は、衣や住をはじめ生きるための物質的基盤を整えるだけでなく、ものにあふれた便利で贅沢な日常生活をおくっています。日本中に道路や橋などが張りめぐらされて、電車やバス、マイカー、飛行機などさまざまな交通手段が利用され、新聞や週刊誌、テレビ、ビデオはもとより、パソコン通信に至るまで、多種多様なメディアを通して急速に社会や暮らしの情報化が進んでいます。このような中、多様な文化的活動を行うことが可能となり、自分らしい生活をおくりたいという人間としてのさまざまな要求が満たされてきました。

しかしながら、このような現代社会のあり方は、いま深刻な壁に突き当たっています。現代工業文明は高い生産力をもって人々の欲求を膨らませてきましたが、私たちは物の豊かさや利便性を追い求めるうちに、膨らんでゆく自らの欲求に振り回されてしまっているのではないのでしょうか。また、メディアや情報機器の発達は、とも

すれば言語化されたものだけでものごとを判断しがちとなり、生命の発している信号を受けとめられない人間を増やしているのではないのでしょうか。さらに、社会や自然を見極め、判断して状況を切り開いていく力をどんどん失ってしまっているのではないのでしょうか。そして、大量生産、大量消費、大量廃棄という生活様式を生み出し、資源・エネルギーや環境面から自らの生存基盤を危うくするに至っています。現代に生きる私たちがこのまま物の豊かさや利便性を謳歌し続け、資源・エネルギーの大量消費や大量廃棄を続けるならば、それは結果として未来世代の生存の選択の幅を狭めることにもなってしまいます。

現代社会がこのような深刻な壁に突き当たるに至った本質的理由は何でしょう。私たちはこの問題の本質には、同世代や未来世代のことを十分に考えることのない社会のありようが潜んでいるのではないかと考えています。いわば「たがの外れた自由」、「行き過ぎた自由」が問題ではないのでしょうか。

もともと西洋において発達した自由の概念は、「勝手気ままなふるまい」や「あるがままの欲望」とは異なります。封建社会から少しずつ取られてきた自由の概念は、市民社会や市場経済を生み出し、思想・信条の自由、表現の自由、職業選択の自由などを保障することにより、人々の精神文化を発展させてきました。人々は自由を享受し、その上立って幸福を追い求めてきました。しかも、自由の概念が確立されていく過程で論議されたように、自由とは「他人の自由を奪わない限りにおいて自分も自由である」という、他の人々や社会との関係で一定の制約が内在するものでした。

しかし、戦後の日本では、自由は欲望や快樂と同じ意味で受け取られてしまったといえます。かつて生産や生活の領域が小さかった間は、この「自由」が生み出す結果も具体的に周囲の人間に見えるために、自由にもおのずと制約がありました。しかし、生産や生活の領域が広がり、その結果が周囲に見えにくくなると、法律に違反したり顕著に人の自由を害しないかぎり、自由を制御するものは無くなったと思われてしまったのです。そして今や「勝手気ままなふるまい」や「あるがままの欲望」が自由という言葉で語られています。社会が複雑化し人間の活動領域が広がり、自由が大きくなればなるほど、より強く自由を律する人間の倫理や道徳が求められるはず

です。
このような認識のもと、私たちは現代社会が突き当たっている諸問題を、単に現象面のみならず、その奥底にある精神構造との関係まで掘り下げて考えることとしました。

(2) 現代社会が突き当たっている諸問題

① 廃棄物に脅かされる環境と有限な資源・エネルギー

動物である人間の生命活動は土や水など自然の恵みによって育まれた生き物を食物とし、これを利用してエネルギーとしたり、細胞の更新・増殖を行って老廃物を体外に出すことで維持されています。この廃棄ができなければ、人間は高熱を発したり不要物の固まりになって死んでしまいます。

環境とは生物がエネルギーを引き出し、老廃物を捨て去ることのできる場のことをいいます。環境には幾重にも重なりがあって、老廃物は次々とその外側の環境へと運ばれていきます。たとえば、人間の排泄物は小動物が食べて分解し、その小動物の排泄物はさらに小さな微生物が分解して小さな分子になり、やがて複雑な分子を作っていく元になっていきます。このように、環境は多様な生き物や自然現象による循環によって保たれています。全ての生物の活動は必ず廃熱と汚れ、いわゆるエントロピーを環境中に放出しそれを増やしつづけます。人間以外の自然界に存する生物の廃熱・廃物は全て自然の循環の中で処理されますが、人間がつくりだし自然で分解不能なものや循環系の中でさばききれないほどの大量の汚れが放出されるとき、環境は悪化し生物は生きられなくなっていきます。

従って、環境問題とは、人間が自らの生命活動の基本である廃棄を処理できなくなっていること、言い換えれば、自然や生命系の循環といった関係を見極めその中で生きていくという基本に気づかずに起きてきた問題です。現代工業文明は、生産から消費の全ての過程で出てくる廃棄物をそのシステムの中で分解したり処理することはできず、大量に環境の中へ放置しています。それだけではなく、環境ホルモンとして生命系の存続を危うくする恐れが最近明らかになってきました。私たちが物の豊かさや利便性を追い求め、そのようなシステムに染まり切ってしまったことが環境問題という結果を招来させているのです。

また、現代工業文明を支えている資源・エネルギーは有限です。これらは地球誕生以来、数億年の時間をかけて生物や自然の力によって形成・蓄積されたものです。現在、私たちはこれを掘り出して加工するだけ、すなわち作る必要がないぶん安価に手に入れて使用することができます。しかし、使用したものを再び元に戻すことは

ほとんどできませんし、できたとしても例えばくず鉄から鉄を作るように更にエネルギーを大量に要し、汚れを環境の中に増やしてしまうのです。これらの生成過程を考え、またこれらを十分に使えない他の国々や未来世代の人々のことを考えれば、安価な資源・エネルギーの大量消費に頼る今のような生活をいつまでも続けていくことはできません。

さらに、化石燃料の大量消費はCO2濃度を上昇させることなどにより、自然が持っている調節機能を障害し、使用不能な熱エネルギーや汚れを滞留させ、地球温暖化などの地球環境問題としてあらわれています。地球環境問題の特質は、地球温暖化の問題を例にとると、人々が自らの幸せを追い求めて生産・消費を行い、日々の営みをおくっていく内に、それらが積もり積もって地球環境に深刻な状況をもたらすという点にあり、従来の公害問題と異なり、現代工業文明のもとに生きる私たち一人一人が被害者であると同時に加害者だということです。そして、この問題をめぐる先進国と開発途上国との国際的な利害対立も厳しい課題です。

現代社会においてこのような深刻な問題が生じてきたのも、自由についての私たちの考え方と密接な関連があるのではないのでしょうか。自由の本質を見据え未来世代のことを考えれば、本来、人類は自らの経済社会活動には「地球生命系のつながりを断ち切らない範囲で」との限界があることに気づかねばなりません。しかしながら、それに気づくことなく、近代の科学技術の発達で自らがあたかも自然を支配できるかのごとく、物質的豊かさや利便性を追い求めた結果、自らの生存基盤を危うくしてしまったのではないのでしょうか。

②農業の危機

農業はかつて人間の生命の源である「食」を提供し、環境保全等の機能を果たすとともに、文化の発展母胎でした。西洋文化圏で文化(カルチャー)という言葉が「耕すこと」を語源としているように、文化という言葉は本来土地や農業と深く関わってきました。人が何を主に食べるのか。そのためにどういう場所、気候風土に住むのか。この二つのどちらが先かわからないほど、農業はそれぞれの風土のもとでそれぞれに違った姿をとり、その土地独自の生き方の形として地域特有の農法と文化を定着させてきました。低地から高地まで、湿地から乾燥地まで、その地にしかできない農業で人間は自らの活動領域を広げ、社会を発展させてきたのでした。このように農業は、自然と人間との関わりの中で、自然に寄り添い人間が人間として生きる業、すなわち生業として認知されてきたのでした。

土から生まれ出るのがなければ人類は死滅することが明らかであるにもかかわらず、近年、農業は蔑ろにされてきました。いま我が国においては、農業は生産性が低く、創造性や新味に乏しく、展望のない職種だと見なされがちで、後継者不足や農村の過疎化が進展しています。分業化や専門化がどんどん進む産業社会の中で、農業は単なる食料生産業として位置づけられています。職業としての農業ではなく、生業としての農業に携わっていると自覚する誇り高い人々は、自らを「農民ではなく百姓だ」と言います。

農業が工業などの近代産業と決定的に異なることの一つは、時間に対する考え方の違いです。種から芽が出て、茎が伸び葉が繁りと順々に生育段階を踏んで成長していくわけですが、生物が実る時間を操作することはほとんどできません。いくら大量の肥料と水、光を与えても苗から実に一足飛びにはならないのです。また、その土地土地の気候風土、田畑一枚一枚の違いによっても時間は違ってきます。土中にいる微生物や気象など、さまざまなもののさまざまな時間が積み重ねられて作物ができていくわけです。そういう意味では農業について人間が操作できる時間は自然や作物が本来持っている時間の極めてわずかな部分だけです。

それにもかかわらず、工業化・近代化が進む社会の中で、農業も生産性を上げるために近代化の道を進みました。その結果、土や作物の本来持つ力は減退し、農業の基盤そのものを危うくしてしまいました。工業の世界の考え方では、同じ種をまき、同じ量の肥料をやり、同じ時間と労働力を注ぎ込めば同じものができるはずで、農業もそれにならぬ機械化や量産化をめざして施設を作り、大量のエネルギーを投入して、能率を上げ生産性を上げようとした。しかし、単一品種の連続栽培は病気を生み、化学合成された肥料や農薬に頼った農業は土中の微生物を殺し、生態系を壊して土の力を弱めていきました。このような中、農村から人が離れ、さまざまな開発によって山や川、林や草地・湿地といった自然環境が失われ、生命系の循環の中にあるはずの農業も、工業と同じように環境中に廃熱・廃物を放出し、土地や環境という自らの存在基盤そのものを危うくしていったのです。

現在の農業の危機は、本質的には現代社会が突き当たっている課題そのものではないのでしょうか。現代社会においては、自然と人間との関わりや、土や水を通した物質循環の視点など、農の営みの持つ本来的な価値が見失われがちであり、まさに、このような姿勢が地球環境問題に代表される現在の深刻な状況を招来してきたのでは

ないかと私たちは考えています。農業・農村を守り育み、その価値を自らに内包していくことが必要であるにもかかわらず、それを実現できない価値観、現代日本社会の制度的枠組みの中にこそ、現在の農業危機の本質があるのではないのでしょうか。

③共同性の喪失、農村の危機

伝統的な農の世界から現代社会の精神のありように目を転じてみると、何が見えるのでしょうか。連綿として受け継がれてきた農村社会では、田植えや刈取り、農地の改良などさまざまな場面における協働作業はもとより、四季折々の村の行事や日常的なふれあいを通じて、共同性や心の絆きずなといった地域社会における精神的風土が育まれました。そこでは、自然を守ることが子々孫々まで人が生きていくことを約束し、地域社会を継続させる基本でした。そのために共同体としてのさまざまな掟おきてが作られ、農村の自治が守られてきたのです。農村に生まれ育った人々は個人であるとともに共同体の一員であり、特に意識せずとも自己を律する姿勢を育んできました。

しかしながら、現代日本社会においては都市化の進展とともにこのような村社会がほぼ姿を消し、日々の生活の中で個人が共同性を実感しにくい社会となりました。いうまでもなく、失われた共同性を懐かしんだり、過去の共同性が育んだ倫理や道徳を押しつけることは適当ではありません。しかし、あたかも個人の活動の自由が一番大事なこととされ集団としての規範が軽んじられていく中で、他人への思いやりや、集団の一員としての個人の身の律し方が見失われてきていると言わざるを得ないのではないのでしょうか。

(3) いま価値観が問い直されている

このような現代社会の現状を踏まえれば、地球環境問題、農業・農村社会の危機をはじめとするさまざまな現象の奥底にある価値観の問題に深く切り込み、自らの自由を律していくことが必要です。

すなわち、私たちは、地球環境や資源・エネルギーについて人類がまだ見ぬ子孫に負っている責任を深く考え、未来世代のために受け渡していくという世代間の倫理を確立することが必要です。このために、世代間の倫理を、先進国はもちろんのこと他の国や地域の人々と共に学び、深めていきたいと思えます。そして、そのような取り組みを通して、社会や暮らしの仕組み、生産、消費、廃棄のあり方を変えていくことにつなげていくべきであると私たちは考えています。

では、そのためには、どのような価値観、ないしは考え方のものさしを持って、行動していけばよいのでしょうか。

2. 今とは別の考え方のものさしとは

私たちは、これまでの議論を通して、農の営みに内在する「農的価値」が現代社会の課題を切りひらいていく考え方のものさしになり得るのではないかと考えました。

(1) 農的価値とは

農民は、作物を生み出す土を守り育て、作物が育つ自然の時間を大切に扱い、それを取りまく自然に感謝し、かつ、その力を畏れてきました。そのため、人々は村を作り、掟を作って、子々孫々まで農業が可能な地域と共同性のあり方を伝えてきました。江戸時代の農書(宮崎安貞『農業全書』1697年)にも、「我身上わがしんじょうの分限ぶんげんをよくはかりて田畠おのそのふんざいを作るべし。各其分際より内バなるを以てよしとし、其分に過ぐるを以て甚だあしゝとす」という言葉があります。現代社会のように作れるかぎり作って使い尽くしてしまうのではなく、自らの自由を律するという哲学がありました。そのことによって、農業・農村社会は自然の循環や多様性を意識的にも本能的にも守り、未来世代が生きる場を作ってきたといえます。

また、農業や農村は自然を畏敬し、人間の分際を守りながら、徐々に生きる場を広げ自らの能力を高めてきました。かつての農法の中に「作りまわし」と「作りならし」という知恵があります。作りまわしとは輪作のことですが、作物の組合せや土地の力で病気を予防してゆく方法であり、何世代もの人の知恵として蓄積され受け継がれてきたものです。作りならしとはいわゆる実験のことですが、土地の気候風土や生態系の中で試行錯誤を行い、他の生態系の中にあつた新しい種や技術を取り入れてきました。

さらに、農業は作物が育つ自然の時間を大切にします。このような農業のあり方とは異なって、現代工業文明は大量の資源・エネルギーを投入して時間あたりの生産量を上げてきました。しかしながら、このような工業的手法によっても生物固有の時間軸に人間が手を加えることには限界があり、地球の生命系を安定的に存続させるためには、生物固有の時間軸で営まれる生命循環が重要であると認識することが必要ではないでしょうか。

また、農の営みに内在するこうした価値観は、人間と自然、人間と人間との関係についての普遍的かつ本質的な関わりとして、単に農業・農村社会のみならず、まちの暮らしや工業の世界にも秘められているのではないのでしょうか。たとえば、かつて職人世界と呼ばれていた工業には、鉄や木材といった材料の性質や変化を見極め、それを使うであろう一人一人の生活や環境などを勘案して、ずっと使い続けられるような製品に仕上げていく技の巧みさがあちこちに残っています。また、手間暇をおし、時間を大事にし、物を大切にするなど、まちの暮らしにも見出し出されます。人も生き物の生命を食べて生きています。日々の暮らしで食べ物はむだにしないという考え方は、私たちが口にするものすべてが生命の育った結果であるということに通じており、食の文化として育ち受け継がれてきたと思います。さらに、人間が考えたり、認識したり判断する能力も、自然界の一員としてその摂理に密接に直結していることの証しではないのでしょうか。また、危険、おそれ、やってはいけないことなどを内在した勘というものは、生物界に通じています。私たちは、他の人やあらゆる物に対する愛情とか自然や季節の移り変わりを感じることができます。この喜怒哀楽の感情や経験の積み重ねは、熟練・熟達といった単なる職業の域を超えた人間わざともいえるものになります。感性を養うということが大切なことになってくるのではないのでしょうか。

このように農の営みに内在する価値観には多様な側面がありますが、いたずらに物質的欲求を追い求めず、自らの生命がよって立つ基盤を見据えて人間本来の姿を取り戻すような生き方、未来世代の生きる場のことを考え、自然界と人間とのかかわりの中で物質循環を基礎として自らを律する生き方、このような考え方を「農的価値」と表していきたいと考えています。未来世代のことを考え、「今、何をすべきか、そして何をなすべきか」を真剣に問わなければなりません。いまこそ、さまざまな試行錯誤を経て、子々孫々までその世界を伝えるために宿していた価値観の本質を、現在および未来に生かしていくべきであると思います。

(2) 農的価値の実現に向けて取り組む実験村

それでは、農的価値をものさしとして、「自由を律する」という課題はどのように実現されていくのでしょうか。この課題は、私たちの暮らし方、社会の仕組み全てに課せられています。それらに対して今とは別の考え方のもので当てる変えていくためには、実験や試行錯誤が必要です。

ただ、これらの実験は生命系を基礎とした循環システムの回復をはじめとする人間と自然の関わり、人間社会のあり方に関することです。現実の社会生活の場で行われなければなりません。この実験は、現代社会の中で行われるいわば作りならしともいえるものです。「自由を律する」という課題にあらゆる側面で挑戦するのが実験村です。さまざまな場での挑戦・実験の積み重ねがあってこそ新たな価値観をもった社会を展望できるはずです。

① 実験村とその生みの親である成田空港問題

実験村構想は成田空港問題の中から生まれてきたものです。実験村の本旨が生かされ進んでいくために、その出生からどのように育ってきたか整理することとしました。

成田空港は、日本が国際経済社会の中で大きな位置を占めるための一大拠点としてつくられました。現代の航空システムは、モータリゼーション、工業生産システム、発電など他の工業分野と同様、物の豊かさや利便性を追い求める現代工業文明の一端を担っています。航空機の生産や空港の建設は、レベルの高い工業システムを必要としており、その運用にあたってのエネルギーの大量消費やこれに伴うCO₂の排出、騒音など、環境に与えるマイナス面とともに、現代工業文明の最先端を担う象徴的存在でもあります。また、政治・経済・文化から日常の生活レベルまであらゆる側面で国際間の相互依存関係が進展する中、航空システムは、情報化とともに中枢的役割を担ってきました。

一方で、空港は農村社会にとっては突如として侵入してきた異物でしたが、国策として空港づくりが優先されました。農業・農村の世界や価値観が蔑ろにされ、自らの夢をかけて農業に生きようと思ってきた農民は、将来への展望を打ち崩され、農民としての誇りを傷つけられ、その生き方を否定されたのでした。同時に、空港反

対運動は農民に、空港とは何か、空港のためにとるにたらないものとされた自分たちの農業の意味とは何か、自分たちがよって立つ農地とは何か、村とは何かの問いを投げかけてきたのです。そして「空港に負けない農業」を求めて開始された有機農業との出会いは、ミクロな微生物界とマクロな地球生命系が通じており、複雑にからみ合いながらひとつの世界を形成していることに気づかせてくれたのでした。また、空港によって壊され、自分たちも壊しかけていた村は、自然や世界を見極め、子々孫々まで生きていける力を知らず知らずのうちに身につけられるような仕組みをもっていたのです。

このような中で、国もまた従来の空港づくりを反省し農民の声に真剣に耳を傾けるようになりました。そして、成田空港問題シンポジウムを経て、円卓会議で長年続いた対立構造に終止符が打たれ、地球的課題の実験村構想が発表されたのです。すなわち、「空港に象徴される現代工業文明は地球的規模で深刻な問題を抱えてしまっており、自らの自由を律するという地球的課題を解決し、新しい文明を築くためには、農的価値の回復が必要である」旨の問題提起を行い、実験村を「元B・C滑走路跡地」に建設することを含む実験村構想を提案したのでした。

このような実験村構想の具体化に向けて、検討委員会においては、経済学や物理学、農業、行政、地域、生態学などの視点から3年余りにわたって検討を積み重ねてきました。

その結果、①今、現代社会に最も欠けているのは、多様な生命系を基礎とした自然や循環系に関する視点であり、未来世代に循環システムを受け渡していくために「自らの自由を律する」ことが地球的課題である、②その際、農の営みに内在する農的価値が「自由を律する」ものさしとなる、③農的価値は長年にわたって世界各地で蓄積された叡智であるので、お互いの交流や研究が並行して進められねばならない、④農的価値を追求し、「自由を律する」ことに挑戦する運動を早急に具体化する必要がある、と考えるに至りました。

その過程で、「農的価値をものさしとして自らの自由を律する」という地球的課題の深さと広がり、空港反対運動のみならず成田空港をめぐる社会的問題の総体である成田空港問題を超越していることが明らかになってきました。すなわち、実験村の理念からみれば、国際空港は現代工業文明の象徴として存在していますが、あくまでその一部であり、現代工業文明についての人々の考え方や仕組みが変わる中で変わっていくものです。その意味では、「元BC滑走路跡地に実験村を」という提起は、直接的には成田空港のあり方に対するアンチテーゼですが、本質的にはまさに現代社会の文明論的転換を希求した表現であることがはっきりしてきました。従って、委員会としては新たな文明への挑戦というその本旨に答えることこそ急務であると考えました。

加えていうならば、それぞれが抱えている問題の解決に際しても、実験村の考え方が生かされる必要があると思います。また、そのように活用されることによって実験村のものさしそのものにも磨きがかかれ、ますます意味が深められると思います。空港も、現実の社会的要請と農的価値との間の緊張感を有して自らを律してゆくことが必要です。

②現代社会と実験村の関わり

現代社会の直面している難しい課題を地球規模で解決しようと志す実験村のテーマを、やや具体的に述べてみましょう。

現代社会がそう遠くないうちに何とかしないといけない最も大きな問題は、持続的で安全なエネルギーを永続的に安定して入手するにはどうしたらよいか、という難題です。すでによく知られていますが、石油・石炭・天然ガスという化石エネルギー資源は、この調子で使い続けると、数十年から二百年余りで底をつくと推定されています。ウランを原料とする原子力発電も例外ではありません。かぎられた大きさの地球の地下に埋まっている資源が有限であることは明らかなことですが、私たちはこれまでそういう現実にはきちんと眼を向けてきませんでした。

しかし、現代日本社会が化石エネルギー資源と原子力発電に頼ることを、にわかに取り止めることは無理な相談です。人類が、持続可能で安全なエネルギー資源に基づく社会へ転換していくためには、しかるべき移行期間が必要です。現実的なエネルギー獲得のためのさまざまな実験や小規模な実践に、どうしても時間がかかるからです。このような理想的なエネルギーは、自然エネルギーとか再生可能エネルギーと呼ばれています。太陽光、太陽熱、風力、バイオマス、マイクロ水力、波力、地熱などのことです。外国ではかなり大規模に実施している国もありますし、わが国でも各地で少しずつ利用が試みられています。実験村にとっては、技術的にも制度的にも実験・研究してゆくべき重要課題の一つでしょう。

また、生命系にとっては、水こそがエネルギーや食糧以上に重大な存在です。飲料水の品質が私たちの健康に

どれほど大きな影響を及ぼしているか、年を追って明らかになってきました。カビ臭い水、発ガン性物質のトリハロメタンが含まれている水、後天性アルツハイマー病の原因物質の一つに挙げられているアルミニウムが含まれている水などと、身のまわりの水は不安でいっぱいです。合成洗剤やPCBなどさまざまな化学物質が河川や湖沼に流入し、環境ホルモンとして魚介類やヒトにまで深刻な作用を及ぼしている恐れがあります。田畑やゴルフ場などに使われる農薬が小川の生き物を死滅させ、やがて私たちの健康を直撃するのではないかとという心配も絶えません。水を浄化してきた自然のサイクルを人間の営みの中でいかにとりもどしていくかも実験村の重要課題の一つです。

さらに、日常生活から出てくるゴミの問題があります。20世紀最大の発明は核兵器ではなく大量に排出されるゴミである、という指摘は傾聴に値すると思います。大量消費の現代社会が必然的に伴っている大量廃棄物を、生命権から安全な場所に埋めることは望めません。焼却はダイオキシンの環境への放出をまねき、人体への蓄積が心配になります。日本の女性の母乳から検出されるダイオキシン濃度は、外国のそれに比べて、きわだって高いという報告があります。ゴミについて“ゼロエミッション”は理想ですが、エネルギーなしというわけにはゆきませんし、エントロピーの廃棄をゼロにすることはできません。そこを考慮に入れて最適なシステムを考え出さなければなりません。まだ見ぬ子孫たちへ、生命のつながりを大切にすれば、ゴミ問題は途方もなく大きな課題です。実験村はそのような視点を欠かすわけにはゆきません。

このように考えてくると、やはり私たちは、従来とは別の考え方のも^のさ^し、農的価値の理念をもって、現代社会の仕組みや暮らしのあり方を問い直していく必要があります。すなわち、自分たちの物質的欲求を追い求めることなく、未来世代に資源・エネルギーや良好な地球環境を受け渡していくという視点から、物の生産・販売・消費や社会資本の整備といった各々の局面を見直していくということです。

具体的には、地球生命系の永続を図り人間が未来に生きていくためには、地球環境問題でいえば、あくまで問題は環境負荷の総量をいかに落としていくかということです。環境負荷は人間の社会活動の結果として増大していくものですから、現在のような資源・エネルギー多消費型の経済社会活動は変えていく必要があります。しかし、社会における営みは各々に理由があり幸せや人間的向上を追求して行われているものですから、今のままこれをすぐに変えていくことは非常に困難です。これからは、今とは別の考え方のも^のさ^しをあてて、現代社会の仕組みや暮らしのあり方を見直し、変えていくことが求められているのではないのでしょうか。

また、現代社会の本質は、工業化社会として外面的に現れている部分だけでなく、まさに現代人の無意識の精神構造そのものの中にありますから、一朝一夕に一足飛びの解決が望める性質のものではありません。啓蒙や教育の場を通して自然や社会について考えたり判断したりする力を養い、生身の人間が痛みをもって自らの自由を律し、現代社会の仕組みや暮らしのあり方を変えていくべきものです。

さらに、「行き過ぎた自由」がもたらすものは、限られた国や地域におさまらず、結果が国境を越えて地球的規模で拡がるが多いため、それらの解決もまさしく地球的視点で図られなければなりません。国際的なコミュニケーションを密にして、地球的視野をもって乗り越えるべく取り組んでいくことが極めて重要です。そのためには、国家間、政府間だけの交流だけでなく、草の根レベルでの人と人の触れ合いを通じて相互理解を深めていくことが求められるでしょう。

このような課題を解決するためには、農的価値という考え方のも^のさ^しをもって、我が国内外の人々と交流・連携を行いながら、試行錯誤を重ねていき、農的価値の実験に向けてチャレンジしていくものとしての実験村が必要であると私たちは考えています。

③農的価値の実現に向けて取り組む実験村

(I) 実験村の基本的性格

実験村構想の具体化にあたっては、農的価値を人間社会が広く身につけていくことをめざし、その姿勢に共鳴してさまざまな人が集まってくるような運動を展開していく必要があります。重要なことは、問題の本質を地球的課題として捉え、国際的な拡がり視野に入れて運動するということです。そして、その理念を各々の生活領域や社会領域で実践し活動しながら、社会性を伴って世に広く訴え、人々に理解されていくということではないのでしょうか。

また、実験村が循環の大切さを訴えていくにあたっては、同世代の他の地域・世界の人々や未来世代との関わりなど、人との関わりも視野に入れる必要があるのではないかと思います。

さらに、実験村は、地域再生との関わりも模索していくべきではないかと思います。都市生活者であろうが農民であろうが、すべての生命は土に還り、新しい生命は土からしか生まれてこないということが基礎になるはずで、いま見えにくくなっているそのような循環の糸をそれぞれの場所からそれぞれのやり方で見つけ出して紡ぎだしていく必要があります。

(II) 実験村の具体的活動イメージ

実験村の具体的活動のイメージとしては、「研究・交流・意見交換」、「啓蒙・体験」、「実践」を柱にして、農的価値による挑戦を行うべく、次のような「実験村運動」を行っていく必要があると思っています。

- ①我が国内外の研究者、NGO、農民等と連携をとって学び合い、また、農的価値にかかわる研究や交流・意見交換を行うことを通して、農的価値の意味内容を掘り下げ、その充実を図る。
- ②都市生活者や次世代を担う子どもたちを中心として多くの人々のために、野や山、川、耕地などを現場とし、ミクロ・マクロの自然の仕組み（循環システム）を体で感じ取れるような啓蒙・体験プログラムを用意する。また、エントロピーや環境、水、農などといった問題をめぐってシンポジウムを開く。
- ③自然や生命系の循環を維持できるような制度を新しく作り出して、自然エネルギーの活用、リサイクルや逆工場（廃棄物を再生し、原料とする工場）、ゼロエミッションなどがより望ましいものとなるよう取り組む。
- ④農業者以外の人も関われる循環型農法を実践する実験農場で、食べ物、生物、生命、農業の関係を理解できる場を提供する。また、このような農業を実践しながら積み重ねた体験の蓄積を、啓蒙活動に生かす。

以上は現段階において考えられる例ですが、今後、実験村構想はこれらの具体的活動からなる実験村運動として展開され、我が国内外を問わずさまざまな人々が自由に運動を展開し挑戦を行っていく場となることが必要であると思います。また、これらの諸活動をコーディネートするための組織を設立し、地球的課題への挑戦に向けて各々の主体が活動していく中で各種の連絡・調整を行っていくことが必要であると私たちは考えています。

3. 終わりに

委員会では、実験村構想について3年余りにわたってさまざまな視点から検討を加え、農的価値による挑戦をキーワードに、ここに実験村運動という新しい姿として具体化すべきであると考えました。実験村形成への土台として各地角界でご検討いただければ幸いです。

実験村は未来に生きる若者たちに対する大人たちの責務の証しとなるものです。未来世代の選択の可能性を狭めるのではなく、生存の可能性を広げることが求められています。今後さらに多様な人々によって担われる実験村運動が、地球の未来のために新しい文明観を築いていくことになることを願い、委員会からの報告とします。